
Cross

桜楓

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r o s s

【Nコード】

N 2 2 9 9 I

【作者名】

桜楓

【あらすじ】

日々先生に説教されている不幸な男子高校生 霧島 涼。
ある日、不思議な夢で一人の綺麗な少女に出会った……そして「扉」が開かれる……

O C r o s s プ ロ ロ ー グ

暗い…どこだろここ？

寝転んでいた俺は起きあがって辺りを見渡した

辺りには何もなくて遠くの彼方に小さな光があるだけだ

「何だろここ？まるで…」

いつの間にか俺の目の前に女の子が現れていた

「うわっ！！」

俺はいきなり現れたこと以上にその子の美しさに驚いた。歳は10代後半。すらりとした輪郭。整った鼻と口。髪は栗色で瞳は透き通った水のような蒼色。

「もうすぐ「扉」が開かれる。」

彼女は透き通るような声でいった。

「何いつてるんだ？」

彼女は光にむかって歩きだした

「おい、ちよつと待てよ！」

彼女は振り向き天使のように微笑んだ

「おい、待てよ。おい、おいって！おい！！」
教室が静かになり、クラスの全員が固まった。

「霧島……またお前か……このお約束ヤロウ！！」

ゴリラこと石谷先生がチョークを握り潰しながらいった。

ヤバい。今は俺の苦手な古典の時間だ。

「さつさと顔を洗ってこいこの馬鹿野郎！！」

俺は閃光の如く洗面所にむかって走った。

申し遅れた。俺の名前は霧島 涼。見ての通り不幸な男子高

1 Cross 旅立ち

「はあ〜」

ため息をついていたら、いきなり後ろから声をかけられた。

「どうしたの？そんな暗い顔しちゃって！」

「仕方がねえだろ？あれからみっちり2時間ゴリラの説教聞いていたんだぜ？」

こいつは幼なじみの瑞季。身長は165cmで日焼け気味な肌。茶色の混ざった黒髪をショートカットしているので活発な雰囲気をもたしてる。勉強ができて、見た目も可愛いほうだからクラスの男子に人気がある。学校ではクールだが、本当はかなりの世話焼きでよく俺に勉強を教えてくれる。

「それは涼ちゃんが居眠りなんかするからでしょう？」

「まあ、そうだけどよ…」

「大丈夫。今度から涼ちゃんが居眠りしてたらちゃんと横からシャーペンで刺してあげるから。」

「まて！まて！まて！人をシャーペンで刺すな！痛いだろ？」

「それも涼ちゃんのためなんだよ」

「ならせめて小突くくらいにしといてくれ。」

「それじゃあ涼ちゃん、起きないでしょ！ほら、涼ちゃんの家につ

いたよ！じゃあね。宿題はちゃんとやるんだよ！」

「お前は、俺の母親かよ？」

「どうだろうね。じゃあまた明日！バイバイ」

「オウ、じゃあな！」

瑞季と別れて、家につくと俺はお袋にコテンパンに叱られた。ゴリラなんか目じゃないほどに……

俺が部屋で勉強していたら瑞季が訪ねてきた。

「何のようだ？今、課題をしてる最中なんだけど？」

「いや、涼ちゃんの勉強をみてあげようと思って……」

「別にいいよ。そんなことしなくても」

「いいから、いいから。」

「……開いた……『扉』が……」

突然、頭に声が響いた。待てよ、この声は……

「涼ちゃん……なにこれ？」

瑞季が指差した先には、不思議なマークが浮かんでいた。

「……さあ……おはいりなさい……『扉』に」

再び声が響いた。そして思い出した。この声は今日の夢で聞いた声だ！

扉がマークから出現した。

「ちえっ。はいれってんならはいってやるよ！-」

「涼…ちゃん？」

「瑞季…俺、いつてくるよ！」

「ちよっ、ちよっと！」

「お袋、よろしくな！」

俺は扉の中に飛び込んだ。この先に、なにがあるかしらないままで

……

2 Cross 師匠

「起きなさい！」

瑞季か？まだ眠いんだ…あと10分だけ寝かせてくれよ…

「起きなさい！！！」

まだ10分たつてないぞ瑞季…

「起きろっていつてるんだよ～～！！！」

いきなり体に電気が走った。

「……………っ！？」

目の前に若い女の子がたっていた。水色に近い蒼い瞳に、ブラウンの髪。服装はどこかの制服のようだ。

「やっと目が覚めたみたいだね」

「いきなりなにするんだ？」

「あんたがこんなところで寝ているから、起こしてあげたのよ！」

「起こすために何をしたんだ？」

「呼んでも起きないから、軽～く電流を流したのよ！」

「……………！」

驚きで声が出せない

「なんでおどろいてるの？これくらい普通でしょ？」

「普通なのか…電気を発生することが？」

「つつか…あんたどうやってここに来たの？ここには師匠のはった空間閉鎖魔術をはってあったのに…」

「魔術だと…？」

「あんた。本当になんにも知らないの？…まあいいわ。とにかく師匠の家に行きましょう。詳しい話はそこで聞くわよ！」

俺はともかく彼女についていった……

ほどなく彼女の師匠の家についた。どうやら、彼女は師匠の家に住んでいようだ。

「アス力…」

いきなり後ろから声が聞こえた。彼女は怯えていた。

「師匠！」

師匠と呼ばれた人は、若い女性だった。黒い髪を後ろで束ねていて、服装はきつちりとしたレディーススーツをきて眼鏡をかけている。とても彼女が怯えるような表情はしていない。むしろ、優しい先生のような笑みをうかべて近づいてきている。師匠がゆっくり眼鏡を

外した。

「アスカ…あなた、また人に向かって魔術使ったでしょう？………
一体何回いったらわかるんだこのバカ弟子は〜！！」

「キャ〜〜！！」

彼女と師匠の追いかけてが始まった。俺には全く気づいていない
ようだ。師匠の表情は、さっきの優しい笑みは消え、鬼と化してい
る…

「この〜〜！！あら、お客様かしら？こんにちは」

「こ…こんにちは」

「た…助かった〜」

アスカは安堵の息をついた。師匠からは、さっきの鬼のような表情
は消えていた。しかし、俺は心の中で誓った。この人を怒らせない
ようにしようと。

「ここではなんですから…どうぞ入ってくださいな」

師匠の家は木々に囲まれたもりの中であつた。中は、とても整頓さ
れていた。

「私の名前は、サクラと申します。この子は、弟子のアスカとい
います。」

「俺は涼といいます。」

「涼さんですか？素敵な名前ですね。」

聞くには、サクラさんは25歳で、アスカは俺の一つしたで15歳らしい。

「では、この世界について、簡単に説明しますね。」俺は、サクラさんにこの世界について話してもらった。

この世界は、北と南にある2つの大陸で出来ているようだ。ここは、北の大陸のなかで最も大きな町で『グレイスタウン』という場所だ。サクラさんの家はグレイスタウンの北にある森の中だ。様々な果物が実り、近くには綺麗な川がある。サクラさんは人混みが嫌いなのでここに住んでいるそうだ。南の国は10年前に起こった戦争で負け、今は北の魔術師達が空間転移魔術で時空を歪め、こちらから行くことができなくなっているらしい。

そして、この世界では魔術を使うことができるらしい。種類は様々あり、電気を発生させたり、空間を移動したりできるようだ。

俺はいままでのことをサクラさんにはなした。

「……つまりあなたは、扉をくぐって異世界からきたのね？そしてアスカの修行場で寝ていたということですね？」

「はい。多分そういうことになります。」

「きっとその扉は、空間転移型の魔術なんだよ！ね、そうですね
師匠？」

アスカが自信満々にいった。

「そうですね。でも異世界とこの世界を繋ぐなんて、かなりの魔力をもった人じゃないとできないわ!」

「すみません!聞きたいんですけど魔力ってなんですか?」

俺はサクラさんに質問した。機嫌を損ねないように注意して…

「魔術を使うときに必要なものです。簡単にいったら精神力のようなものですね!簡単な魔術なら「ルーン」と呼ばれる印のようなものがあれば使えるけど、異世界とつながら「ルーン」だけではつながることは出来ないはずですよ。」

「そんなこと出来るのはかなりの強さの魔術師くらいしかないわよ!」

アス力がいった。

「俺をこの世界に送った魔術師を探しだして、もう一度扉を開かせることができたらもとの世界に戻ることが出来ますか?」

「できる可能性はあると思います。ただし、魔術師を探すためにも魔術を学ぶ必要があると思います。」

「魔術って学んでできるようなものなんですか?」

「はい!ある程度魔術の基礎を学んで、あとは精神力と才能があれば魔術を使うことが可能です。」

「じゃあ、俺はサクラさんの弟子になりたいんですけど、弟子にし

てくれませんか？」

「いいですよ！そのかわりかなりのスパルタ式でやっていきますよ？」

「大丈夫です。スパルタにはなれてます。」

「わかりました。では早速、魔術の基礎から学んでもらいます！」

こうして、俺は師匠ことサクラさんのもとで、修行することになった。

3 Cross 修行開始

俺と、サクラさん、アスカは、森の奥にある修行場にいくことになった。ここから30kmほど離れているようだが、どうやっていくのだろう。

「あのーサクラさん？その修行場までどうやっていくんですか？」

「ああ、いつていましてしたね。私の使う魔術は、空間系なんです。その魔術を使えば私なら200kmくらいを数秒でいくことができるんですよ…」

辺りが真っ白になったと思ったら目の前に異様な景色が広がった。空は暗いのに辺りは明るく、周りには大きな岩が転がっている。

「ここは？」

「着きましたよ。ここが修行場『低速空間』です。ここは普通の場所よりかなり時間が遅くながれているため、ここで1ヶ月修行しても外では1日しかたちませんよ。」

「スゲー！」

サクラさんは、岩に腰掛けた。俺とアスカも岩に座った。

「これから涼さんには、魔術の基礎を学んでもらいます。魔術には系統があります。まずは、自然系。これを使うと電気を操ったり、風を発生させたりすることができます。」

アス力が横から補足説明した。

「ちなみに、私は自然系の中でも攻撃力が高い電気属性の魔術を使うのよ。電気属性は応用がしやすくて扱いやすいのよ！」

「そんなに凄いものなのか！」

「話を続けますよ。」

サクラさんがいった。満面の笑みで

「次に、空間系。空間を操作したり、瞬間移動をしたりすることができます。かなり難易度が高く、癖があります。」

その話を聞いて俺は、ふと思った。

「じゃあ、サクラさんの魔術で異世界とこの世界を一時的に繋げることは出来ないんですか？」

「ごめんなさい。私の魔術ではそこまでのことは出来ないの。」

「そうですか……」

「話を続けますね……。そして、召喚系。これは、守護者や魔物を召喚することができます。ただし、使用者はかなり魔力を消耗します。だいたいの系統はこのようなものです。この他にどこにも分類されない特殊系や、闇魔術と呼ばれる禁魔術などがあります。ここまでわかりますか？」

「……はい」

「まあいいです。あとこの世界では魔術の強さによってランク分けされていてS〜Dに分けられています。」

アスカが自慢気にいった。

「聞いて驚け！私はB・ランクで、師匠はなんとAランクなんだぞ！」

サクラさんが話を進めた。

「魔術は1人につき1属性です。たまに複数の属性を使いこなす「デュアルスキル」をもつ人もいるけれど…そして、魔術を使うには「ルーン」が必要です。ルーンとは魔術の印のようなもので使用者によって形は様々です。」

「私のルーンはこのブレスレットよ。」

アスカが右腕につけていたシルバーブレスレットを見せながらいった。

「師匠のルーンは左手の中指に付けてるリングなんですよ！」

俺は、サクラさんの白くて美しい指をみた。確かに左手の中指にリングが付けてる。

「以上が魔術の基礎です。これからあなたの魔術をだしてもらいます。魔術はあなたの才能によって強さと属性が決まってきます。ではこの魔方阵の真ん中になつて目を閉じてください。」

いつの間にか俺の前には魔方阵が書かれていた。俺は魔方阵の真ん中にたち目を閉じた。

「では、始めます。ゆっくり目を開けてください。」

魔方陣が光を放ち始めた。目を開けると俺は光の中にいた。目の前には自分そっくりの人がたっていた。そっくりさんはいった。

「僕は君の魂だ。君には力がある…何にも屈しない強い心が…今の君に必要なものをあげるよ。」

俺の魂は、光の塊の1つ俺に渡した。

「君の才能は1つじゃない。だから必要になったら、また取りにきてね」

光の輝きが増し始めた。そして気づいたら魔方陣の中にいた。

「見つけましたか？」

サクラさんが俺にきいた。

「はい…」

「そうですか…では、その魔術を発動してください。」

俺は集中した。魂からもらった暖かい光をイメージして…

「…それがあなたの魔術なんですね…」

サクラさんは呟いた。俺の手には紅い炎があった。とても優しい暖かさがあった。

「……綺麗……」

アス力は呟いた。

「涼さん…あなたの魔術は自然系の紅炎属性です。発生は極めて稀で希少属性と呼ばれています。攻撃力、応用力、純度ともに自然系では最高ランクです。これをものにすることができれば、あなたは強力な魔術師にもなることができます。今日は疲れたでしょうから、続きは明日にしましょう。」

サクラさんはそういつて近くの小屋に向かった。俺とアス力も小屋に向かった。俺はベッドにはいつたらすぐに深い眠りについた。

瑞季…元気かな？

涼はふと瑞季のことが頭をよぎった。修行1日目。新しい力を手に入れた涼の修行はまだまだ始まったばかりだ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2299i/>

Cross

2010年12月29日02時25分発行